

論 説

岐阜県郡上市における移住者の移住行動とその背景

奥 田 杏 奈 (愛媛大学社会共創学部卒業生)

石 川 慶一郎* (地域資源マネジメント学科)

* 責任著者

Patterns and conditions of domestic migration to Gujo City, Gifu Prefecture

Anna OKUDA (Graduated Student, Ehime University)

Keiichiro ISHIKAWA * (Regional Resource Management)

* Corresponding author

キーワード：人口移動、地方移住、移住支援組織、空き家利用、郡上市

Keywords: migration, moving to the local areas, migrants support organization, using vacant houses, Gujo City

【原稿受付：2026年7月16日 受理・採録決定：2026年7月31日】

要旨

本稿は、近年移住者が増加した岐阜県郡上市を対象地域とし、移住者の移住行動の特徴を明らかにするとともに、その背景を移住支援組織の機能から考察する。調査結果から、①移住者のうち中京圏出身者には東京圏や大阪圏から中京圏にUターンした後で郡上市に移動するパターンが認められ、東京圏および大阪圏出身者には東京圏または大阪圏から郡上市に移動する傾向がある。②移住者は郡上市の良好な自然環境を主な移住理由としている。③移住者は移住支援組織からの空き家の紹介や個人間の売買で住宅を確保している。ただし、移住者の居住ニーズと居住満足度は合併前旧町村レベルで異なり、移住者が長期間定住する地域、移住者が必ずしも定着しない地域、移住者が個人的活動を重視し、住民とあまり交流しない地域が確認された。移住支援の充実度や移住者の条件といった、合併前旧町村レベルで活動する移住支援組織の意向が、このような移住者像の違いをもたらしている面がある。

I はじめに

1. 研究目的

人口の東京一極集中が進む一方で、それとは逆向きの大都市から地方農村への人口移動が社会的・学術的関心を集めている。かつて1970年代に量的拡大をみせたUターン移動に対し(井上2002)、ライフスタイル移住やアメニティ移住とも呼ばれる近年の地方移住は、移動量が少数で、移動者に移動先の居住経験がなく、移動者が良好な自然・景観を希求する点に特徴付けられる(石川2018; 鈴木2023)。

近年の地方移住や、地方移住への関心の高まりは田園回帰と称され、主に地域振興の観点から期待が寄せ

られてきた。田園回帰に関する議論は、その中心的論者である小田切徳美により、人口移動論、地域づくり論、都市農村関係論の3点に整理される(小田切・筒井編2016)。人口移動論では、農村への移住そのものが対象となり、移住の実態把握やメカニズム解明、移住希望者のニーズ把握などが取り込まれる。地域づくり論では、空き家の活用や移住促進事業など移住受入先地域の実態や計画が考察される。都市農村関係論では、田園回帰に結びつくような都市住民の二地域居住や都市農村交流が検討される。

このうち本稿が考察するのは人口移動論である。東京都民が地方での生活をイメージしたときに東京都心

部へのアクセス性を選好するという佐藤ほか（2014）の指摘からは、地方移住に関心のある層と実際の移住者像との乖離が示唆される。それゆえ、地方への潜在的移動者を捉えるためには、実際に地方移住を実現した者の移動を精査すべきである。作野（2016）は島根県を事例に移住者の属性や移住理由を示したが、先行研究において移住者の居住地選択や移動の過程は十分に明らかにされたとはいえない。

ところで、上述の作野（2016）の研究において、移住者の属性と移住先の地域特性は市町村単位で検討されている。市町村合併により地方自治体の範囲が広域化したことを考慮すると、同一自治体の中でも移住者や移住受入体制には地域差があることが予想される。市町村より下位の単位で移住者と移住先地域との関係を捉えた研究として、林（2015, 2019, 2023）や黒川ほか（2019）による岐阜県郡上市和良町での研究がある。事例の普遍性や特殊性についての検討が必要だが、移住者の生活構築に合併前旧町村レベルで活動する移住支援組織¹⁾が大きな役割を果たすという知見は示唆に富む。移住支援組織が移住希望者のスクリーニングポイントとして機能しているという佐藤（2023）の指摘を踏まえれば、ローカルに活動する移住支援組織は地域特性の一要素として捉えられるだろう。

すでに社会学では「あるべき移住者像」と農村移住者の多様な実存との乖離を認めている（渡邊ほか編 2023）。地理学は、この問題意識を共有し、農村移住者の多様性とその条件について空間的な視点から考察すべきだろう。以上を踏まえ、本稿は、市町村内の差異に着目し、地方移住者の移住行動の特徴を明らかにするとともに、その背景を移住支援組織の機能から考察することを目的とする。

2. 対象地域とデータ

本稿の対象地域は岐阜県郡上市である（図1）。岐阜県は2011年度から2014年度にかけて移住者数が多い都道府県の上位5県に含まれる（作野 2016）。岐阜県の42の市町村の中で全域が過疎地域に指定される10市町村の1つが郡上市である。住民基本台帳に基づく郡上市の人口は2024年2月時点で38,392人である。

郡上市は岐阜県のほぼ中央に位置し、市の面積は1,030km²で県の面積の約10%を占める。森林が市域の約90%を占め、木曽川水系の一級河川である長良川の源流域を成している。豪雪地帯であり、全域が振興山村地域に指定されている。2004年に八幡町、大和町、白鳥町、高鷲村、美並村、明宝村、和良村の7町村が合併し、郡上市となった。2009年の本庁支所方式の採用により、旧町村ごとに地域振興事務所が設置され、



図1 対象地域

注) Contains modified Copernicus Sentinel data 2026

旧町村の範囲が実質的な行政サービスの単位として機能している。

郡上市の2021年度の移住者数は101人であり、岐阜県内では高山市（245人）、中津川市（225人）、大垣市（215人）、岐阜市（130人）に次いで多い。以上のように、郡上市は、地理的に不利な部分が多く、産業や生活の制約が多い地域であるのにも関わらず、移住者の比較的多い地域である。

本稿は、郡上市の移住者および移住支援組織の実態を旧町村ごとに明らかにするが、そのためのデータを現地調査により入手した。Ⅱ章では、インタビュー調査の結果をもとに、郡上市の合併前旧町村単位で活動する移住支援組織の実態を示す。Ⅲ章では、アンケート調査の結果をもとに、郡上市の移住者の移住行動を明らかにする。Ⅳ章では、インタビュー調査の結果をもとに、Ⅲ章の結果を裏付ける。Ⅴ章では、前章までに得られた結果をもとに、郡上市への移住の特徴とその背景について考察する。最後にⅥ章では、本稿のまとめと今後の課題を示す。なお、本稿における移住者とは、郡上市での居住経験がなく、調査時点で郡上市に定住している者とする。インタビュー調査とアンケート調査の概要については各章の冒頭で詳述する。

Ⅱ 岐阜県郡上市における移住支援組織の活動実態

郡上市内に活動拠点のある3つの移住支援組織を対象に、活動内容や実績を尋ねる半構造化インタビューを実施した。一般社団法人郡上・ふるさと定住機構は郡上市全域を活動のスケールとしており、石徹白地区地域づくり協議会、和良おこし協議会は、それぞれが拠点を置く旧町村単位で活動している。調査期間は2023年8月～2024年1月である。調査は対面またはオンラインで、1～2時間程度かけて行った。

1. 一般社団法人郡上・ふるさと定住機構

2008年に官民協働で設立された郡上市交流・移住推進協議会は、2018年から一般社団法人郡上・ふるさと定住機構と名称を替え、市から業務委託を受けて移住・定住支援を実施している。郡上・ふるさと定住機構の事務所には、専門の相談員が常駐しており、移住希望者に対して情報発信や体験・交流を通じた移住支援を行っている。対面の相談だけでなく、オンライン相談も行っている。業務は、主に移住・定住支援、空き家バンクの運営、ひと・まちづくり事業の3つである。移住・定住分野では、前述した相談窓口の他に、移住者交流イベントの企画・開催や県内外で行われる移住イベントへの出展などを行っている。空き家バンクの運営については、2023年度より市から業務委託されている。市内の不動産業者と連携し、不動産所有者と移住・定住希望者とのマッチングを目的として空き家・空き店舗などの情報発信をしている。ただし、空き家バンクは物件の紹介（窓口業務）のみで、契約交渉などの仲介行為はしていない。ひと・まちづくり事業では、Uターン者増加を目的として市内企業や団

体と連携してICTとサイエンスを融合させた活動や企業講座などを地元の小・中学生向けに実施している。

図2は、郡上・ふるさと定住機構への移住相談件数と面談件数を示したものである。移住相談件数は面談、電話、メール、手紙、ファックスなどの総数であり、面談件数は、移住相談件数の中から実際に面談を実施した数である。2018年～2022年までの移住相談総数は733件で、うち実際に面談した件数は185件である。2022年の移住相談件数が少ない理由は、2021年度まで郡上・ふるさと定住機構が空き家バンクを運営しており、空き家に関する問い合わせも移住相談件数に含めていたが、2022年度は郡上市の都市住宅課が空き家バンクを管理することになり、空き家に関する問い合わせが機構になくなったためである。ただし、移住に関する相談件数自体は2021年度と2022年度で大差がないという。相談窓口に来る移住希望者の特徴として、ほとんどが移住希望地を決定しておらず、移住目的に応じて機構が地域を紹介するケースが多い。田舎暮らしがしたい、悠々自適な生活がしたいという漠然とした目的・要望や相談者の情報から適切な移住先を紹介している。

図3は、郡上・ふるさと定住機構が関与した移住者数と世帯数の推移を示したものである。2008年～2022年の15年間で701世帯1,133人が機構を通じて郡上市に移住しており、その多くは2015年以降の移住者である。移住世帯の世帯主の年齢は29歳以下209世帯、30歳代223世帯、40歳代115世帯、50歳代37世帯、60歳代39世帯、70歳以上9世帯、不明69世帯であり、若年層が多い。また、世帯主の前住地は岐阜県237世帯、愛知県209世帯、関東86世帯、

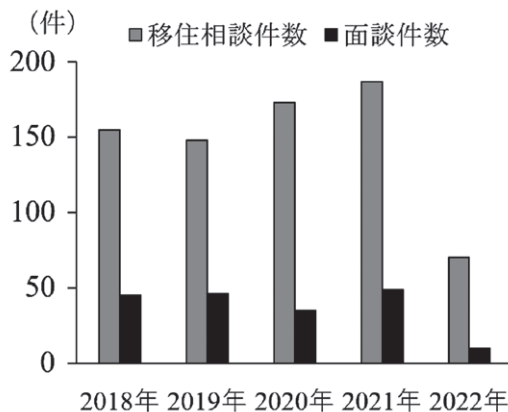


図2 郡上・ふるさと定住機構への移住相談件数と面談件数
(現地調査により作成)

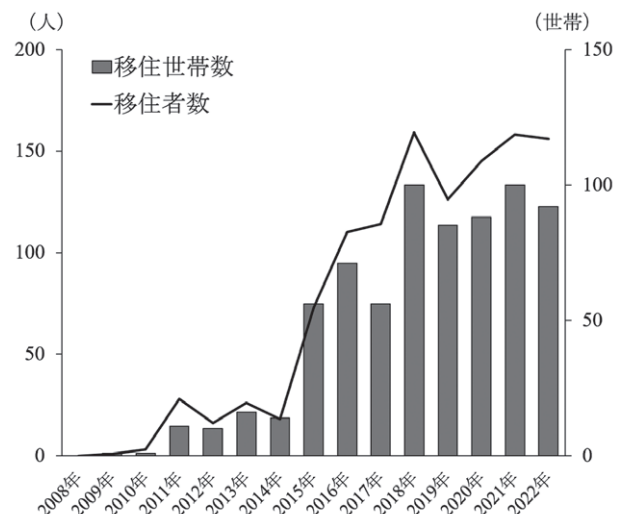


図3 郡上・ふるさと定住機構が関与した移住者数と移住世帯数の推移
(現地調査により作成)

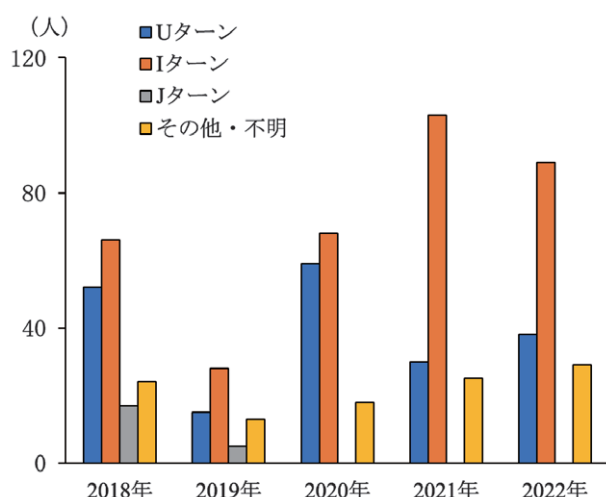


図4 移動パターンごとにみた郡上・ふるさと定住機構が関与した移住者数の推移
(現地調査により作成)

関西 52 世帯、その他 78 世帯、不明 39 世帯であり、岐阜県と愛知県をあわせた数が過半数を占めるものの、関東や関西からの移住者が一定数存在し続けている。図4に示すように、機構を利用した移住にはIターンが最も多く、上述の年齢と前住地についての実績は地方移住者の傾向とみなせる。

2. 石徹白地区地域づくり協議会

地区内の人口減少・流出を是正するべく、地区内の有志が岐阜県のまちづくり支援チームと郡上市役所の企画課と協働して、2007年に石徹白地区地域づくり協議会が設立された。2007年～2009年の3年間は、市が事務局をする形で活動していたが、2009年から事務局を石徹白地区へ移管した。発足当時は地域住民が中心として活動していたが、現在は移住者が主体となって協議会を運営している。地域唯一の小学校を存続させることが子育て世代の流出を防ぎ、人口維持に直結するという方針のもと、子育て世帯の移住推進に注力している。具体的な活動内容は、移住促進のウェブサイト制作、移住相談窓口、移住体験イベントの開催、全国的な移住フェアへの出展、空き家意向調査、空き家改修・サブリースなどである。2011年以降は地域おこし協力隊の募集・受入も行っている。

石徹白地区地域づくり協議会は、子がいるまたは今後子の出生が見込まれる世帯であり、かつ長期定住を予定する世帯を支援の条件としており、面談を通じて移住希望者に選別的な提案を行っている。面談の際には、冬季の降雪量・積雪量、交通手段の問題など、石徹白地区での移住のデメリットを必ず伝える。地域内は就業場所や施設がほとんどないので移住後に創業するか、移住前に雇用先を確保することを薦めている。

「(1、2年の) 短期間で中途半端に移住して活動されても、地域の人に迷惑が掛かるのでやめてください」、「田舎暮らしがしたいだけならば、石徹白地区でなくとも良い。暮らしやすい地域は他にもあるから、他の地域へ移住した方が良いのではないかと敢えて厳しいアドバイスをすることもある。こうした発言には、移住希望者や移住相談者に本当に移住する覚悟があるかを確認する意図がある。石徹白地区に居住している移住者のほとんどが、協議会が設定したハードルを乗り越えて移住しているため、移住後に転出する人はほとんどいないという。地域おこし協力隊の定着率も高い。年間4、5件ほど石徹白地区への移住希望者がいて、最終的に1世帯ほどが移住を実現する。

2007年から2022年までに子育て世帯または結婚可能性のある若年単身世帯14世帯34人が石徹白地区に移住し、2023年時点で同地区に居住している。このうち1世帯は郡上市の「郡上カンパニー」の事業の採択が、2世帯は地区での雇用が、6世帯は新規事業の立ち上げが、1世帯は孫ターンが、それぞれ移住の契機となった。

移住者が移住後に地区内で出産した子は15人である。小学校の児童数は2016年時点で4人まで減少していたが、移住者の出生により回復し、2023年時点で28人となった。2011年以降に招致した地域おこし協力隊の数は7人であり、2023年時点で任期中の者が1人、任期終了後も定住している者が4人、任期終了後に転出した者が2人である。

組織の設けた移住条件が移住希望者の移住実現に強く影響を与えていることは、2007年、2009年、2010年、2012年、2017年の移住者が0世帯・0人であることにあらわれている。また、近年は、地区内での住宅の確保が難化している。移住希望者や相談者数は数えられていないが、移住者に貸せる空き家が不足しているため、移住のハードルが従来より上がっている。

3. 和良おこし協議会

和良おこし協議会の中心的な活動は、空き家を利用した移住者への住宅の提供である。振興事務所、地域協議会、自治会、地域住民などの協力を得て、和良町内の空き家情報を収集して移住希望者に紹介する取り組みをしている。空き家は、移住者に賃貸され、どの物件も月額3万円で住むことができる。郡上市が運営する空き家バンクからも地区内の空き家情報は確認できるが、実際に和良町に訪問して判断して欲しいという方針があり、市の空き家バンクには外観や築年数、詳細な間取りを伏せて掲載している。

和良おこし協議会では移住相談窓口を設けており、支援情報の提供や移住のアドバイスなどを実施して

いる。移住相談数は移住支援事業を本格的に開始した2015年度以降増加傾向にあり、2020年以降は年間160件以上の問い合わせが来ている。2015年度から2022年度までは移住希望者の約90%が実際に現地訪問していたが、2023年度は、相談件数・見学件数ともに少ない状況となっており、見学者は5世帯にとどまっている。

和良町の見学に訪れる移住希望者のほとんどは、インターネットを利用して移住というフレーズで検索をかけたり、空き家の情報がある地域を検索したりして和良町に辿り着いた人である。田舎暮らしを移住理由とする人が大多数で、和良町の他にも候補地が複数あり、和良町について詳しく知らない人も少なくない。ビジネスや起業がしたいという目的で移住を検討する移住者もいる。商売の内容が和良町で定着できない可能性があるかと判断できる場合は、事業内容や計画を詳しく追究したり、場合によっては「もしかすると商売の需要があり市街地がある八幡町方面に移住した方がいい」と勧めたりしている。それでも移住者たちが和良町での起業を強く希望するのであれば応援する旨の話をしている。

和良おこし協議会では、移住促進の分野の他にも地域振興のための活動の企画・運営をしている。SNSやホームページなどの媒体を活用して情報を発信している。その情報を見て、「この地域が楽しそうだったから」、「和良のような地域に身を置きたい」と相談に訪れる希望者もいる。協議会の取り組みが功を奏しており、地域の活性化や移住者の増加に繋がっている。

移住・定住支援事業を開始した2015年度から2022年度までに協議会を通じて移住したのは44世帯91人であり、このうち2023年の調査時点で定住しているのは36世帯70人である。移住者の年齢層は30～50代が中心である。自然環境の中で子育てしたい世帯や、起業して店舗を経営したいと家族で移住する世帯がいる。移住相談でも、家庭菜園ができる環境を希望する人が多い印象である。自給自足の範囲内で畑を耕す住民もいれば、トマト農家になった住民もいる。高齢の移住者であれば悠々自適に畑仕事しながら暮らしたいという人もいる。都会からの高齢移住者は、草取りや地域の人の交流ができる田舎に魅力を感じると話す移住者もいる。和良町では、2011年に和良おこし協議会が発足して以来、地域おこし協力隊を5人招致しており、うち4人が任期満了後に定住している。

一方で、協議会を経由せずに移住した者もいる。人数自体は多くなく、協議会を経由せずに移住する方が少数派である。協議会を経由せずに移住した移住者は、年に1、2世帯ほどあるかないかである。協議会を経由していない移住者も、協議会経由で移住してきた人

と同様に接することを心掛けている。同じ地域に住む仲間として、「あの人は移住者だから」、「あの人は元々和良に住んでいる人だから」という線引きをしない・させないように立ち回っている。

和良おこし協議会では移住するにあたって特別な移住条件は設けていないが、移住希望者に対しての面談を必ず行っている。和良町での生活のメリット・デメリット両方を伝えるようにしている。和良おこし協議会としては、若者や子育て世帯に来て欲しいという思いはあるが、年齢や性別などの属性によって移住希望者を拒むことはない。基本、どのような人でも大歓迎という姿勢をとっている。移住前・移住後のフォローを徹底している。

Ⅲ 移住行動に関するアンケート調査の結果

1. 調査の概要

アンケート調査は2023年11月から2024年1月にかけて実施した。配布対象は白鳥町石徹白地区、和良町、大和町上栗巣地区である。これら3地区の選定理由は、当該地域を拠点に活動する移住支援組織（石徹白地区地域づくり協議会、和良おこし協議会、母袋わくわく会）が移住者を全世帯把握しており、全数調査が可能なためである。白鳥町石徹白地区と大和町上栗巣地区では移住支援組織を通じて回答票を配布・回収した。和良町の調査はオンライン形式で実施し、移住支援組織を通じて回答フォームのURLが記載された用紙を配布した。白鳥町石徹白地区では移住者15世帯のうち11世帯に配布し、5世帯8人から有効回答を得た。和良町では移住者39世帯すべてに配布し、19世帯24人から有効回答を得た。大和町上栗巣地区では移住者5世帯すべてに配布し、4世帯6人から有効回答を得た。分析対象者は28世帯38人である。

調査項目は以下のとおりである。世帯に関しては、属性、住宅、移住過程、郡上市以外の移住検討地域、移住動機、補助金受給・制度や地域団体の支援利用の有無、永住意識を尋ねた。個人に関する設問は、年齢、出身地、続柄、移住年などの属性、移動経歴、郡上市への転居理由、地域住民との関係性、地域活動への参加、居住満足度である。

2. 世帯に関する結果

表1は分析対象者の属性と移住過程を示したものである。IDのSは白鳥町石徹白の世帯、Wは和良町の世帯、Mは母袋の世帯を示している。まず、世帯構成をみると、夫婦のみ世帯が9世帯、夫婦と子世帯が9世帯、一人暮らし世帯が8世帯であり、核家族世帯が多い。特に白鳥町石徹白地区では5世帯中4世帯が夫婦と子世帯である。その他の回答では、夫婦で移

表1 分析対象者（世帯）の属性と移住過程例

ID	世帯構成	子の年齢	現住居	現住居の入手方法	移住までの期間	移住前の郡上市訪問回数	移住前の郡上市での体験・準備
S1	夫婦と子	2、6、8、13	持ち家（中古）	個人間の売買	1年以上	数えられないくらい多い	宿泊、短期滞在、情報収集、訪問
S2	夫婦と子	5、9	持ち家（中古）	個人間の売買	3ヶ月以上半年未満	複数回	地域主催のイベントに参加
S3	その他（移住後離別）		持ち家（中古）	地域団体からの紹介	半年以上1年未満	10回以上	地域主催のイベントに参加、情報収集
S4	夫婦と子	4	持ち家（中古）	個人間の売買	3ヶ月以上半年未満	0回	なし
S5	夫婦と子	2、4、5、7	持ち家（中古）	個人間の売買	1ヶ月未満	0回	なし
W1	単身		借家（中古）	地域団体からの紹介	半年以上1年未満	数十回	地域主催のイベントに参加、宿泊、情報収集
W2	夫婦のみ		借家（中古）	地域団体からの紹介	1年以上	複数回	地域主催のイベントに参加、宿泊、情報収集、訪問
W3	夫婦のみ		持ち家（中古）	地域団体からの紹介	半年以上1年未満	2回	訪問
W4	夫婦と子	3、6、10	借家（中古）	地域団体からの紹介	半年以上1年未満	1回	訪問
W5	夫婦のみ		借家（中古）	地域団体からの紹介	半年以上1年未満	4回	地域主催のイベントに参加、宿泊、その他（田んぼオーナー、空き家見学）
W6	夫婦のみ		借家（中古）	地域団体からの紹介	3ヶ月以上半年未満	4回	地域主催のイベントに参加、情報収集、訪問
W7	夫婦のみ		借家（中古）	地域団体からの紹介	1ヶ月未満	3回	短期滞在、訪問
W8	無回答		持ち家（中古）	地域団体からの紹介	3ヶ月以上半年未満	無回答	地域主催のイベントに参加
W9	夫婦と子	12、14	持ち家（中古）	借りていた物件を購入	半年以上1年未満	20回以上	宿泊、訪問
W10	単身		借家（中古）	地域団体からの紹介	1ヶ月未満	0回	なし
W11	夫婦のみ		持ち家（中古）	地域団体からの紹介	1ヶ月以上3ヶ月未満	1回	情報収集
W12	単身		借家（中古）	地域団体からの紹介	3ヶ月以上半年未満	10回	地域主催のイベントに参加、宿泊、情報収集
W13	夫婦のみ		持ち家（中古）	個人間の売買	1年以上	数えられないくらい多い	宿泊、その他（スキー、キャンプ）
W14	単身		借家（中古）	地域団体からの紹介	1ヶ月以上3ヶ月未満	1回	情報収集、訪問
W15	夫婦のみ		持ち家（中古）	地域団体からの紹介	1ヶ月未満	1回	宿泊
W16	単身		借家（中古）	地域団体からの紹介	1ヶ月未満	年2回ほど	地域主催のイベントに参加、情報収集、訪問、その他（郡上踊り）
W17	夫婦のみ		借家（中古）	地域団体からの紹介	半年以上1年未満	4回	地域主催のイベントに参加、宿泊、情報収集、訪問
W18	夫婦と子	23	持ち家（中古）	地域団体からの紹介	半年以上1年未満	無回答	地域主催のイベントに参加
W19	単身		借家（中古）	地域団体からの紹介	1ヶ月以上3ヶ月未満	3回	地域主催のイベントに参加、情報収集、訪問
M1	夫婦と子	8	借家（中古）	地域団体からの紹介	半年以上1年未満	3~4回	情報収集、訪問
M2	単身		借家（中古）	地域団体からの紹介	1ヶ月以上3ヶ月未満	0回	なし
M3	夫婦と子	46	持ち家（中古）	個人間の売買	1年以上	複数回	地域主催のイベントに参加
M4	その他（きょうだい）		持ち家（中古）	個人間の売買	1ヶ月未満	複数回	その他（釣り）

(アンケート調査により作成)

住したが移住後に離婚して一人暮らしをしている世帯（S3）と、きょうだいで移住した世帯（M4）が確認された。夫婦と子世帯について、子の年齢をみると、9世帯中7世帯が18歳未満のみとなっており、子育て中の世帯が多いことがわかる。

住宅については、全ての世帯が中古物件に居住している。所有関係は持ち家と借家それぞれ半数ずつである。住宅の入手経路については、移住支援組織などの地域団体からの紹介が20世帯、個人間の売買が7世帯である。移住当初は個人間の賃貸で住宅を確保したが、のちに持ち家として所有することになり、所有関係が変化した世帯（W9）が確認された。白鳥町石徹白地区の移住者は個人から住宅を購入する人が多いのに対し、和良町の移住者の過半数が地域団体から紹介を受けた中古の借家に居住している。

移住までの期間は、1ヶ月未満が6世帯、1ヶ月以上3ヶ月未満が4世帯、3ヶ月以上半年未満が5世帯、半年以上1年未満が9世帯、1年以上が4世帯であり、多くの世帯が1年以内で郡上市への移住を果たしている。郡上市への訪問回数は、0回が4世帯、1回が3世帯、2回以上が19世帯、無回答が2世帯であり、分析対象者は2回以上の訪問を経て郡上市に移住する傾向がある。ただし、この値は転居の決定から転居までの期間の訪問回数ではなく、転居前の訪問回数の総数である。移住前の体験・準備は、単なる「訪問」だけでなく「地域主催のイベントへの参加」や「情報収集」が多く、分析対象者は現地での活動を通じて移住を検討している。その他の回答として、和良おこし協議会の活動である田んぼオーナー制度への参加や空き家見学（W5）、スキーやキャンプ（W13）、郡上踊り（W16）、釣り（M4）が挙げられ、文化資源や自然環境を享受した経験のある者が少なくない。

郡上市への移住に際し、郡上市の何らかの補助金を

利用した世帯は12世帯であり、補助金の内訳は移住者支援（7世帯）、住宅支援（4世帯）、就労・創業支援（2世帯）、子育て支援（2世帯）、結婚支援（2世帯）である（複数回答）。一方、無回答の1世帯を除く、過半数の15世帯は補助金を利用せずに移住を果たしていた。

表2は分析対象者の郡上市以外の移住候補地を示したものである。28世帯中17世帯が移住先として郡上市以外を候補に入れており、このうち10世帯が岐阜県内を候補にしていた。岐阜県外の移住候補地としては、愛知県豊田市（W8、W13）、愛知県東栄町（W8）、愛知県豊根村（W8）、三重県伊賀市（W3）、三重県尾鷲市（W13）、岡山県西栗倉村（W5）、山口県上関町祝島（W10）、宮城県亘理郡（W12）、福島県南相馬市（W12）、長野県飯田市（W13）、兵庫県丹波市春日町（W15）、滋賀県米原市（W19）、滋賀県高島市マキノ町（M3）などが挙げられ、候補地は中京圏に限られないことが分かる。また、長野県周辺地域（W4）、長野県八ヶ岳、静岡県伊豆半島（M3）といった回答もあり、特定の自治体ではなく、抽象的なエリアで検討していた世帯も確認された。

郡上市以外に候補地のあった17世帯の中で、実際に問い合わせ・訪問した世帯は13世帯であった。そのほとんどが同一の候補地を問い合わせ・訪問した地域として挙げており、当該候補地への移住を入念に検討していたことが分かる。

移住を検討した地域および問い合わせ・訪問した地域がともになしと回答した世帯（現住地への移住のみを考えていた世帯）は10世帯であった。特に白鳥町石徹白地区の世帯はS2以外のすべての世帯が郡上市以外に候補地を用意していなかった。一方で、和良町の移住者世帯は候補地が複数あり、数ある候補地を比較しながら現住地を選択したと解釈できる。

岐阜県郡上市における移住者の移住行動とその背景

表2 分析対象者（世帯）の郡上市以外の移住候補地

ID	移住を検討した地域	問い合わせ・訪問した地域
S1	なし	なし
S2	岐阜県関市、岐阜県揖斐川町	岐阜県揖斐川町、滋賀県米原市
S3	なし	なし
S4	なし	なし
S5	なし	なし
W1	なし	なし
W2	無回答	無回答
W3	三重県伊賀市、岐阜県大垣市、関市、美濃市、下呂市	三重県伊賀市、岐阜県大垣市、関市、美濃市、下呂市
W4	長野県周辺	長野県、岐阜県関市、高山市
W5	岡山県英田郡西栗倉村、岐阜県加茂郡白川町、東白川村、山県市	岡山県英田郡西栗倉村、岐阜県加茂郡白川町、東白川村、山県市
W6	岐阜県恵那市、中津川市、八百津町、白川町、東白川村	岐阜県恵那市、中津川市、八百津町、白川町、東白川村
W7	なし	なし
W8	愛知県豊田市、東栄町、豊根村、岐阜県中津川市、下呂市、東白川村、八百津町	愛知県豊田市、東栄町、豊根村、岐阜県中津川市、下呂市、東白川村、八百津町
W9	なし	なし
W10	山口県上関町祝島	愛媛県、奈良県
W11	岐阜県下呂市	岐阜県下呂市
W12	宮城県亘理郡、福島県南相馬市	なし
W13	長野県飯田市、愛知県豊田市、三重県尾鷲市等多数	愛知県豊田市、東栄町等多数
W14	岐阜県郡上市大和町	なし
W15	兵庫県丹波市春日町	兵庫県丹波市春日町
W16	なし	なし
W17	岐阜県恵那市、中津川市、八百津町、美濃市、白川町	岐阜県恵那市、中津川市、八百津町、美濃市、白川町
W18	岐阜県大垣市上石津町、垂井町、池田町	岐阜県大垣市上石津町
W19	滋賀県米原市	なし
M1	なし	なし
M2	なし	なし
M3	静岡伊豆半島、長野県八ヶ岳、滋賀県高島市マキノ町	新潟県佐渡市
M4	岐阜県本巣市根尾	なし

（アンケート調査により作成）

表3 分析対象者（世帯）の現住地選択理由と転居可能性

ID	現住地を選択した理由	郡上市の自然環境に求めた要素	今後の予定居住年数	転居の可能性がある理由
S1	子育て環境、自然の享受、知人・友人からの紹介、地域付き合いの濃淡、その他（人の良さ）	食の自給、ヒーリング効果、子育て環境に適している、自然の恵みを資源として仕事に活かせる。	永住希望	該当なし
S2	自然の享受	子どもが自然から学べること、子育ての場、日常の豊かさ。	永住希望	該当なし
S3	子育て環境、気候、郡上市出身者との結婚	該当なし	その他（できるだけ長く）	老後の生活を考えると、交通の不便さや冬の厳しさ。
S4	移住支援制度の充実度、自然の享受、移住者の多さ、地域付き合いの濃淡	自然を間近に感じながら、生ごみをコンポストで処理し、堆肥化し、畑で野菜を育てる。夏は川で遊び、冬は雪遊び、雪かき。自然と共に生きている暮らしがしたい。	永住希望	該当なし
S5	自然の享受	水のきれいなところがよかった。	永住希望	該当なし
W1	自然の享受、アウトドア・レジャー、知人・友人からの紹介	山や川など	3年	転勤・仕事の都合、結婚
W2	移住支援制度の充実度、自然の享受	山林資源	20年	無回答
W3	自然の享受、家庭菜園、家族や親戚との近居	静かに暮らせること。	永住希望	該当なし
W4	子育て環境、災害リスク対策	該当なし	10年	現在転居願望はないが、古民家に住んでいるため修繕箇所が多く永住できるとは思わない。
W5	移住支援制度の充実度、自然の享受	無回答	永住希望	該当なし
W6	移住支援制度の充実度、自然の享受、移住者の多さ、その他（物件の良さ）	お茶やご飯にしたり、民間療法として使ったりと多岐にわたって暮らしに取り入れることができる。	永住希望	該当なし
W7	就業地、交通の便	該当なし	20年	老後はインフラが十分整った場所へ行きたい。
W8	自然の享受、気候、家庭菜園、家族や親戚との近居、地域付き合いの濃淡	山水の利用	永住希望	該当なし
W9	自然の享受、アウトドア・レジャー、その他（郡上市に友人がきたから）	郡上に訪れて、持続可能な生き方を知り、そのように自分もなりたかったから	その他（おもしろくなくなったら、いつでも他に引越すつもり）	海の近いところに住みたい。
W10	自然の享受、災害リスク対策、家庭菜園、知人・友人からの紹介、地価・地代	求めている全てがここには在る。山水を家庭内に引き込めたら言うことはない。	永住希望	該当なし
W11	自然の享受	無回答	永住希望	該当なし
W12	家族や親戚との近居	該当なし	永住希望	該当なし
W13	気候、災害リスク対策、家庭菜園、アウトドア・レジャー、地価・地代	該当なし	10年	老後は、医療と移動手段が身の周りにある所に住みたい。
W14	就業地、子育て環境、自然の享受、家庭菜園、アウトドア・レジャー	無回答	5年	家庭の事情（介護、子供の進学など）
W15	自然の享受、地域付き合いの濃淡	綺麗な自然環境、食料の自給自足	永住希望	該当なし
W16	就業地	該当なし	5年	住居の都合
W17	起業、移住支援制度の充実度、自然の享受、気候、移住者の多さ、その他（物件の良さ）	山や田畑が当たり前にあり、自給自足の生活。庭先や近所で食べるものを採取したり植物を使った自然療法や道具作りがしたい	永住希望	該当なし
W18	移住支援制度の充実度、自然の享受、地価・地代	太陽光発電のない豊かな自然の維持。自分で作った野菜を食す。	永住希望	該当なし
W19	子育て環境、自然の享受、アウトドア・レジャー	手つかずの自然の中で過ごすことで、ありのままの美しさに触れ、自分自身の心の在り方の軸を穏やかに保ちたい。	永住希望	該当なし
M1	移住支援制度の充実度、子育て環境、アウトドア・レジャー	該当なし	永住希望	該当なし
M2	就業地	該当なし	わからない、未定	父母の実家との兼ね合い
M3	自然の享受、気候、家庭菜園が可能、アウトドア・レジャー、地価・地代	空気・水（自給自足が可能）、大自然に抱かれて生きていきたい。	永住希望	該当なし
M4	アウトドア・レジャー、知人・友人からの紹介、地価・地代	該当なし	永住希望	該当なし

（アンケート調査により作成）

表3は分析対象者の現住地の選択理由と転居可能性について示したものである。「自然の享受」(19世帯)が最多であり、「アウトドア・レジャー」(8世帯)、「家庭菜園」(6世帯)、「気候」(5世帯)が比較的多く、分析対象者が郡上市の自然環境を重視していたことが分かる。「自然の享受」と回答した世帯に対して具体的な内容を聞くと、「自給自足の生活ができる」(S1、S4、W6、W15、W17、W18)、「自然と共存することで自己実現を達成したい」(W3、W9、W19、M3)など自然資源を活用した持続可能な暮らしを郡上市に求めている様子がうかがえた。

郡上市の自然環境に求めた要素をみると、山、川、雪、水など、具体的な自然資源を挙げる世帯が少なかった(S4、W1、W2、W8、W10、W17、M3)。郡上市は耕作放棄地が多く地価も比較的安価なため、家庭菜園を営みたい移住者のニーズに合致している。空き家には耕地付きの物件もあり、自給自足の生活を実現させやすい。また、長良川の源流域では鮎漁やラフティング、シャワークライミングなどの河川を活用

したレジャーが充実している。冬季のスキーやスノーボードなどのウインタースポーツも盛んである。アウトドア・レジャー活動にアクセスしやすい点、自然と共存した暮らしができる点、そして、子育てや教育に適する点(S1、S2)で、郡上市の自然環境が移住者の選択に大きく影響している。自然環境以外の理由としては、「移住支援制度の充実度」(7世帯)や「地域付き合いの濃淡」(4世帯)が比較的多く、地域コミュニティや移住支援を重視する世帯も少なくない。

今後の予定居住年数について、永住希望以外を回答した世帯には、転居の可能性がある理由を自由記述で尋ねている。今後の予定居住年数は「永住希望」(18世帯)が最多であり、分析対象者の居住満足度はおおむね高いことがわかる。

転居の可能性がある理由として、老後の生活の心配から交通インフラが整備された地域への移住や、移動手段を選択できるような環境への移住を希望する世帯がみられた(S3、W7、W13)。S3は冬季の生活の厳しさを不安要素として挙げており、積雪の問題や車社

表4 分析対象者(個人)の属性

ID	性別	年齢	続柄	移住年	出身地	移住前の職業/年収	移住後の職業/年収	移住後の従業地
S1	男	48	世帯主	2011	岐阜県岐阜市	管/400～500万円	管/500～600万円	岐阜県郡上市白鳥町
S2	女	42	世帯主	2015	千葉県山武郡	自営業/200～300万円	自営業/200万円以下	無回答
S3	男	40	世帯主	2017	長崎県諫早市	サ/300～400万円	自営業/200万円以下	岐阜県郡上市白鳥町
S4	男	41	世帯主	2015	神奈川県川崎市幸区	会社員/400～500万円	農/300～400万円	無回答
S5	女	42	配偶者	2011	岐阜県岐阜市	自営業/200～300万円	自営業/200～300万円	岐阜県郡上市白鳥町
S6	男	36	配偶者	2015	岐阜県大垣市	自営業/200～300万円	自営業/200万円以下	無回答
S7	女	38	配偶者	2014	愛知県名古屋	販/200～300万円	専/200～300万円	岐阜県郡上市白鳥町
S8	女	41	配偶者	2015	神奈川県鎌倉市	販/200～300万円	農/300～400万円	無回答
W1	男	30	世帯主	2021	愛知県春日井市	販/400～500万円	地域おこし協力隊/200～300万円	岐阜県郡上市八幡町
W2	男	63	世帯主	2017	愛知県刈谷市	販/500～600万円	農/200万円以下	岐阜県郡上市和良町
W3	男	31	世帯主	2023	京都府向日市	農/200～300万円	自営業/200万円以下	岐阜県郡上市和良町
W4	男	36	世帯主	2018	兵庫県神戸市	専/600～800万円	農/400～500万円	岐阜県郡上市和良町
W5	男	40	世帯主	2007	兵庫県神戸市	無職/200万円以下	サ/300～400万円	岐阜県郡上市八幡町
W6	男	58	世帯主	2019	神奈川県相模原市	サ/500～600万円	サ/300～400万円	岐阜県郡上市明宝
W7	男	50	世帯主	2020	無回答	未回答/200～300万円	サ/200万円以下	岐阜県郡上市金山町
W8	男	58	世帯主	2020	岐阜県下呂市	会社員/500～600万円	会社員/500～600万円	岐阜県下呂市
W9	女	65	世帯主	2022	岐阜県各務原市	団体職員/300～400万円	自治体職員/200～300万円	岐阜県郡上市八幡町
W10	男	65	世帯主	2018	福岡県朝倉郡小石原村	専/600～800万円	無職/200万円以下	該当なし
W11	男	43	世帯主	2023	大分県日田市	自営業/300～400万円	自営業/300～400万円	岐阜県郡上市和良町
W12	男	37	世帯主	2015	岐阜県瑞穂市	学生/200万円以下	自治体職員/300～400万円	岐阜県岐阜市柳津町
W13	男	56	世帯主	2023	岐阜県大垣市	販/400～500万円	無職/現在所得なし	該当なし
W14	男	46	世帯主	2017	愛知県丹羽郡扶桑町	管/400～500万円	農/200～300万円	岐阜県郡上市和良町
W15	男	36	配偶者	2022	愛知県豊田市	公務員/400～500万円	無職/200万円以下	岐阜県美濃市
W16	女	68	配偶者	2022	和歌山県橋本市	無職/無回答	無回答	無回答
W17	女	34	配偶者	2016	岐阜県飛騨市	専/200～300万円	サ/200万円以下	岐阜県郡上市和良町
W18	女	58	配偶者	無回答	東京都目黒区	サ/200～300万円	無回答	東京都渋谷区
W19	女	58	配偶者	2020	岐阜県下呂市	無職/所得なし	無職/現在所得なし	該当なし
W20	女	59	配偶者	2018	愛知県名古屋	専/800～1,000万円	専/200万円以下	岐阜県郡上市和良町
W21	女	34	配偶者	2019	愛知県名古屋	無職/400～500万円	無職/400～500万円	該当なし
W22	女	44	配偶者	2023	大分県日田市	自営業/200万円以下	無職/200万円以下	該当なし
W23	女	61	配偶者	2018	愛知県西春日井郡豊山町	無職/所得なし	無職/現在所得なし	該当なし
W24	女	31	配偶者	2023	岐阜県揖斐郡池田町	事/200～300万円	サ/200万円以下	岐阜県郡上市和良町
M1	男	44	世帯主	2020	愛知県名古屋守山区	自営業/300～400万円	自営業/200～300万円	岐阜県郡上市大和町
M2	男	39	世帯主	無回答	北海道江別市	無回答	無回答	無回答
M3	男	77	世帯主	2014	新潟県佐渡市	サ/200万円以下	無職/200万円以下	該当なし
M4	男	76	世帯主	2004	岐阜県多治見市上野町	自営業/200万円以下	無職/200万円以下	該当なし
M5	女	38	配偶者	2020	東京都東久留米市	サ/200万円以下	無職/現在所得なし	該当なし
M6	女	74	配偶者	2014	愛知県一宮市	サ/200万円以下	無職/200万円以下	該当なし

注) 職業は自由記述式、管は管理職、サはサービス職、販は販売職、農は農林漁業、専は専門技術職、事は事務職を指す。

(アンケート調査により作成)

会である郡上市で老後を迎えることに対して悩みを抱えている。また、W4は「古民家に住んでいるため修繕箇所が多く、長く永住できるとは思わない」と住宅の問題を挙げている。M2のように「父母の実家との兼ね合い」という家庭の事情で転居を検討する世帯や、W9のように「(移住先での暮らしが) おもしろくなかったら、いつでも他地域に引っ越すつもり」と、移住生活のモチベーションの変化によって移住歴関係なく転居を検討する世帯もみられた。

3. 個人に関する結果

続いて、アンケート調査で得られた移住者38人に関する結果を分析する。IDのSは白鳥町石徹白地区の移住者、Wは和良町の移住者、Mは母袋地区の移住者を指す。前節で示した世帯IDと本節で示す個人IDとは同一の回答者として紐づかない点に留意が必要である。

表4は分析対象者の属性を示したものである。男性は22人、女性は16人であり、男女ともに30～50歳代が中心である。

転居年は2015年以降が29人であり、居住年数は10年未満がほとんどである。特に和良町の移住者のほとんどが2015年以降であるが、これは和良町で活動する移住支援組織が空き家対策を含め事業を本格化させたのが2015年であることを反映している

出身地は岐阜県が11人、愛知県が10人であり、比較的郡上市に近い中京圏出身者が多い。東京圏や大阪圏、地方圏出身者も確認でき、白鳥町石徹白地区では8人中3人が東京圏出身であった。

郡上市への転居前と転居後とを比較して転居後に年収が減少した者は26人であり、分析対象者の多くが郡上市への移住後に年収を減少させている。転居後は個人事業主として生計を立てる者が多く、S4、S8、W2、W4、W14のように農林漁業従事者に転職した移住者もみられた。転居後の従業地は郡上市内が18人であり、18人中15人が現住地の地区内で就業している。移住者のうち就業者は居住する地域の外へ通勤するよりも、現住地の近辺で就業する傾向がある。

表5は分析対象者の出身地から現住地までの移動経歴と前住地からの転居理由を示したものである。出身地から現住地までの移動回数は1回が13人、2回が5

表5 分析対象者（個人）の移動経歴と郡上市への転居理由

ID	移動経歴	郡上市への転居理由
S1	岐阜県岐阜市→鹿児島県鹿児島市→東京都→岐阜県岐阜市→岐阜県郡上市	地方移住欲求の高まり
S2	千葉県山武郡→東京都→岐阜県大垣市→岐阜県郡上市	周辺環境への不満
S3	長崎県諫早市→愛知県西尾市→愛知県名古屋→岐阜県郡上市	周辺環境への不満
S4	神奈川県川崎市→岐阜県郡上市	周辺環境への不満
S5	岐阜県岐阜市→東京都→岐阜県岐阜市→岐阜県郡上市	就職・転職
S6	岐阜県大垣市→東京都→岐阜県大垣市→岐阜県郡上市	周辺環境への不満
S7	愛知県名古屋→岐阜県郡上市	就職・転職
S8	神奈川県鎌倉市→岐阜県郡上市	その他
W1	愛知県春日井市→岐阜県郡上市	就職・転職
W2	愛知県瀬戸市→愛知県名古屋→岐阜県郡上市	退職
W3	京都府向日市→大阪府大阪市→岐阜県郡上市	周辺環境への不満
W4	兵庫県神戸市→大阪府池田市→神奈川県川崎市→岐阜県郡上市	就職・転職
W5	兵庫県神戸市→岐阜県郡上市	地方移住欲求の高まり
W6	神奈川県相模原市→岐阜県郡上市	特になし
W7	出身地不明→愛知県愛西市→岐阜県郡上市	就職・転職
W8	岐阜県下呂市→岐阜県郡上市	周辺環境への不満
W9	岐阜県各務原市→愛知県名古屋→大阪府箕面市→大阪府枚方市→岐阜県岐阜市→東京都大田区→フィジー→愛知県名古屋→千葉県市川市→岐阜県郡上市	地方移住欲求の高まり
W10	福岡県朝倉郡小石原村→愛知県名古屋→岐阜県郡上市	退職
W11	大分県日田市→大阪府大阪市→大阪府八尾市→山梨県上野原市→岐阜県郡上市	周辺環境への不満
W12	岐阜県瑞穂市→岐阜県大垣市→岐阜県瑞穂市→岐阜県郡上市(八幡町)→岐阜県瑞穂市→岐阜県郡上市(和良町)	就職・転職
W13	岐阜県大垣市→岐阜県郡上市	無回答
W14	愛知県丹羽郡→愛知県豊田市→愛知県豊橋市→東京都町田市→愛知県丹羽郡→岐阜県各務原市→岐阜県郡上市	周辺環境への不満
W15	愛知県豊田市→愛知県名古屋→石川県金沢市→岐阜県郡上市	地方移住欲求の高まり
W16	和歌山県橋本市→岐阜県郡上市	周辺環境への不満
W17	岐阜県飛騨市→愛知県稲沢市→岐阜県飛騨市→東京都江戸川区→神奈川県横浜市→岐阜県飛騨市→岐阜県下呂市→岐阜県飛騨市→岐阜県郡上市	周辺環境への不満
W18	東京都目黒区→東京都世田谷区→神奈川県相模原市→岐阜県郡上市	その他
W19	岐阜県下呂市→岐阜県郡上市	周辺環境への不満
W20	愛知県名古屋→愛知県岩倉市→東京都新宿区→愛知県瀬戸市→愛知県名古屋→岐阜県郡上市	地方移住欲求の高まり
W21	愛知県名古屋→大阪府西淀川区→福井県越前市→愛知県大治町→岐阜県郡上市	周辺環境への不満
W22	大分県日田市→大阪府八尾市→山梨県上野原市→岐阜県郡上市	周辺環境への不満
W23	愛知県西春日井郡豊山町→愛知県名古屋→岐阜県郡上市	地方移住欲求の高まり
W24	岐阜県揖斐郡池田町→京都府京都市→大阪府大阪市→岐阜県郡上市	就職・転職
M1	愛知県名古屋→岐阜県郡上市	周辺環境への不満
M2	北海道江別市→岐阜県郡上市	就職・転職
M3	新潟県佐渡市→愛知県名古屋→愛知県一宮市→岐阜県郡上市	退職
M4	岐阜県多治見市→岐阜県郡上市	退職
M5	東京都東久留米市→愛知県名古屋→岐阜県郡上市	周辺環境への不満
M6	愛知県一宮市→愛知県名古屋→愛知県一宮市→岐阜県郡上市	退職

(アンケート調査により作成)

人、3回が13人、4回が2人、5回が2人、6回が1人、8回が1人、9回が1人である。

中京圏出身者18人の主な移動パターンには、中京圏内で移動を完結させるパターン(11人)と中京圏外への転出を経て中京圏にUターンし、その後郡上市に移動するパターン(7人)がある。前者のパターンを示す11人の内訳は、出身地から郡上市にダイレ

クトに移動した者が7人、中京圏内での移動を経て郡上市に移動した者が4人である。後者の7人（S1、S5、S6、W14、W17、W20、W21）はいずれも東京圏または大阪圏での居住歴がある。

東京圏・大阪圏出身者は9人中7人が東京圏または大阪圏から郡上市に移動している。このうち4人は出身地から郡上市に直接移動しており、3人は東京圏または大阪圏内部を転々としたのちに郡上市に移動している。中京圏に居住歴のある者は前住地が中京圏である2名に限られた。

前住地からの転居理由は「就職・転職」が8人、「退職」が5人であり、就業状況の変化を理由に挙げる者が少なくない。一方「結婚」「出産」はいずれも0人であり、分析対象者の郡上市への移動はライフステージの変化には必ずしも基づいていないことがわかる。「周辺環境への不満」が最多（15人）であることは、分析対象者が自然の享受を求めて郡上市を選択したことと整合する。6人が「地方移住」を挙げており、前住地の評価に関わらず、地方移住それ自体が転居決定の理由となりうる。

表6は分析対象者自身による地域住民との交流に関する評価、評価の理由、分析対象者の参加する地域活動を示したものである。「1. とても良い」が11人、「2. 良い」が23人、「3. 普通」が4人、「4. 悪い」が0人、「5. とても悪い」が0人であり、分析対象者は地域住民と比較的良好な関係を築けていると評価している。

評価理由としては、毎日の会話や野菜・料理のやり取りなどの近所付き合いの多さを挙げる移住者が多い。なかには地域住民と一緒に習い事に参加したり、食事をしたりする移住者も確認された。「必要以上にお節介ではない」（W10）や「積極的に交流していない」（S6）といった回答は、地域参加に関する移住者の態度・行動に濃淡があることを示す。

ほとんどの移住者が何らかの地域活動に参加しており、例として自治会の清掃作業や祭りなどの行事を挙げている。自治会のほぼすべての活動に参加する者（W1、W6、W21）や、自ら主体となって地域づくりに携わったり、自治会の役員などを務めたりする者もみられた（S1、S7、W1、W10、W17）。自治会の活動以外では、地域交流として月に1回カフェを開く者（W20）や、お茶会、食事会、飲み会などに参加する者がいた（S7、W16、W17）。ただし、同地域の移住者であっても、清掃作業などの参加頻度には差があった。

表7は分析対象者の現住地に対する居住満足度とその理由を示したものである。「1. 大変満足」が14人、「2. 概ね満足」が20人、「3. 普通」が4人、「4. やや不満」が0人、「5. とても不満」が0人であり、ほとんどの

移住者が現在の暮らしに満足している。

評価理由は、大きく分けて良好な人間関係、良好な住環境、移住目的の達成の3点に分けられる。良好な人間関係については、地域住民の人柄の良さや（S2、W9、W11、W13、W17、W19、W21、M3、M5）、地域住民との交流（S3、S5、S7、W2、W12、W14、W16、M1、M4）が挙げられた。「隣人も必要以上にベタベタしない」と地域住民との程よい距離感に満足している移住者もいれば（W23）、「少し干渉されていると感じることがある」（W17）、「人間関係が濃く、価値観が合わない人ともある程度は付き合う必要があるのが少しストレス」（W4）、「雇用に関する社会の考えが30年くらい前のように感じることが多い。自分の職場以外でも感じることがある」（W20）と田舎暮らし特有の人付き合いや価値観で苦労する移住者もみられた。

良好な住環境については、やはり地域の自然環境を肯定的に評価している移住者が多く、子育ての場としてのポジティブな回答もみられた（S8、W21、M5）。一方、冬季の生活（W1）、老朽化した家屋（W1、W12）、買い物利便性（W6）など、山間部や農山村の環境に由来するネガティブな回答も少なくなかった。

移住目的の達成については、就農や創業、自給自足といった移住前の理想や目標を実現したこと自体に肯定的な評価が与えられた（S1、W7、W10、W24、M1、M3、M6）。ただし、当然ながら移住後も目標に向けて活動中の移住者がいることに留意したい（W24）。

Ⅳ 移住行動に関するインタビュー調査の結果

上記アンケート調査とは別に、郡上市への移住者に対し、独自のインタビュー調査を行った。調査は半構造化形式で実施し、2023年9月から2024年1月までの期間に1回あたり1～2時間程度かけて行った。インフォーマントは、移住支援組織の紹介およびスノーボールサンプリングを通じて協力の得られた、八幡町2人、大和町3人、白鳥町6人、高鷺町1人、美並町1人、明宝1人の計14人である。このうち2014年以前の移住者が8人、2015年以降の移住者が6人である。調査では、移住者個人の基本属性に加え、移住動機や移住に対する価値観などの意識について尋ねた。

1. 属性

表8は分析対象者の属性を示したものである。出身地はさまざまで、岐阜県が2人、愛知県が3人、それ以外が9人である。前住地は岐阜県が3人、愛知県が4人、それ以外が6人、不明が1人である。出身地と前住地がともに岐阜県であるEに東京圏での居住歴

岐阜県郡上市における移住者の移住行動とその背景

表6 分析対象者（個人）の地域とのかかわりに関する評価

ID	評価	評価理由	参加する地域活動
S1	とても良い	地域づくり活動を一緒に取り組んでいる、日常的に野菜や食べ物のやり取りがある。	月2回地域づくりの定例会、年数回の奉仕作業、神社神事、学校や公民館のイベント
S2	良い	野菜やおかず等沢山いただける。応援や声をかけてくれる。	婦人会の参加、ボランティア活動、在所の掃除、公共の建物の雪囲い等
S3	良い・普通	地域からの頼まれごとがよくある、会話もある、行事のような近所付き合いもある。	河川の清掃、草刈り、飲み会、神社・祭りの手伝い
S4	良い	畑の近くも家の近くも皆さん良くしてくれる。	消防、雪囲いつけ外し、井普請、祭り
S5	とても良い	毎日、交流がある。	スポーツ、仕事
S6	普通	積極的に交流していない。	神社氏子総代、在所の清掃等
S7	良い	出会うと野菜の苗やできた野菜をもらう。世間話をしたり、昔のことを教えてもらう。たまにご飯を一緒に食べる。	年2回地域の結の作業、婦人会（神社の掃除・花壇づくり）、年3回神社の祭事、2、3ヶ月に1回有志の女子会（飲み会）、公民館イベント（文化祭・雪の集いなど）、地域のNPO団体への所属
S8	良い	移住者に良くしてくれる。	無回答
W1	良い	お呼ばれしての飲み会、お裾分けなどがある。	地域おこし協力隊としてほぼ全ての活動に参加している。
W2	良い	自治会内での深い近所付き合い。	中山間の会長として活動、氏子総代役、認定就農者として活動、自治会活動は欠かさず参加している。
W3	良い	移住者にも親切。気にかけてくれる。	清掃活動
W4	良い	近所付き合いがある。	年2回の草刈り、月1回の飲み会
W5	とても良い	郡上の前住んでいたところは、あまり応援してくれなくて、嫌になって離れて、今住んでいる地域は自分たちのやりたいことをかなり応援してくれる。	月1回の組の集まりや祭りに強制参加ではないが、参加するようにしている。
W6	良い	近所付き合いがある。色々重宝されていると思う。	自治会活動はすべて参加している。
W7	良い	近所付き合いもまあまあだから。	年5回ほどの草刈り、清掃活動、祭事
W8	とても良い	家同士が離れているが、出会うと挨拶を交わし地域活動にも積極的に参加できているから。	年2回の草刈り清掃作業、町内会の総会出席、祭礼の旗立て
W9	良い	親切にしてくれる。	自治会の行事
W10	普通	自治会役員や組内での付き合いがあるが、必要以上にお節介ではない。	年6回自治会役員、小学生の通学見守り隊、年4回中山間地の草刈り、葬祭、神社の祭礼、他地域の行事
W11	良い	近所付き合いがある。	年に数回清掃活動に参加。飲み会、祭事、年中行事
W12	とても良い	隣の方が気にかけてくれる。朴葉寿司をくれる。	年2回の会議、年2回の草刈り、河川清掃、防災訓練、集会所での地域サロン
W13	良い	声かけをしてくれる。	まだ自治会に参加していないのでわからない。
W14	良い	仕事のため地域集会への参加率は低い、散歩の時などは住民と近況報告などの雑談をする。	年2回の地域の総会、夏季に3回程度の清掃活動
W15	普通	近所付き合いがある。	年1回の草刈り、月1回の地域おこし会議、年中行事、部落内の葬式の手伝い、クリスマス会
W16	良い	地域の活動に参加している、ご近所さんと一緒に手芸教室に通っている。	毎月地域の方たちとお茶会をしている。
W17	良い	近所付き合いがある。色々重宝されていると思う。	蜚の保全活動、飲み会
W18	良い	たまに会っても優しく接してくれる。	主人（世帯主）が全部やっている。別居なので活動には参加できていない
W19	とても良い	出会えば挨拶をし、SNSでも交流がある。	2ヶ月に1回女性で集まって行う会食に参加している。
W20	とても良い	近所付き合いがある。色々重宝されていると思う。	毎月カフェを開いている。お祭りに参加している。お助けグループに所属している。
W21	とても良い	地域の人たちとの会話。	春季に地区の祭り、年に3、4回の草刈り、清掃活動、祭事後の飲み会など、ほぼすべての地域活動に参加している。
W22	とても良い	都会にはない住民同士の繋がりやコミュニケーションが多く、何かあるとアドバイスや手助けをしてくれる人ばかりでとてもありがたい。	移住して日が浅く、活動に参加できていない。今後積極的に参加したい。
W23	普通	近所付き合いがある。	見守り隊、サロン運営
W24	良い	近所付き合いがある、開業した店舗に地元の人が来店してくれるため交流がある、地元の人の家に習い事へ通っている。	春の地域の集会、夏の清掃活動
M1	良い	近所の方たちとは会えば話をし、困ったときは助け合っている。	美化運動、祭事、年中行事
M2	とても良い	無回答	地域イベントには極力参加するようにしている。
M3	とても良い	毎日会話している、近所付き合いも沢山ある。	年4回の美化運動、自治会、祭り
M4	良い	毎日会話がある、付き合いが沢山ある。	シニアクラブ、百姓の会、年中行事
M5	良い	会えば話をする、子どもを可愛がってくれる、野菜を分けてくれる、子どもの面倒を見てくれる・預かってくれる、畑や田んぼのことを教えてくれる。機械を貸してくれる。	集会所、体育館の掃除、祭り
M6	良い	毎日会話している。	清掃活動（年2回）、自治会主催の食事会

（アンケート調査により作成）

表7 分析対象者（個人）の居住満足度

ID	暮らしの満足度	満足度の理由
S1	大変満足	この地域で暮らし、この地域のために活動することが自分の人生のミッションだから。
S2	概ね満足	人が温かい、親切。環境が素晴らしい。
S3	概ね満足	人付き合いも楽しい、特に不満はない。
S4	概ね満足	子どもとのびのび暮らしている。自営で就農できている。
S5	大変満足	地域の人との関係が良い。
S6	概ね満足	環境がいい。
S7	概ね満足	地域の人と協働しながら、自給自足とまではいかないが、自力で暮らしを作っている実感があり安心感がある。
S8	概ね満足	のんびりと生活できているため。子供が多く、都会では周りを気にした生活になりそう。
W1	概ね満足	家は広く、騒音なども気にしなくて良い。地域の人が優しい。古民家なので隙間から虫が入る。冬場は寒い。
W2	大変満足	初見で気に入った空き家に入居出来て就農者となり（生活費は持ち出しが酷いが）近所付き合いも良い感じで日常を過ごせている。
W3	大変満足	移住目的が順調に達成できている。地域の移住に対する支援が手厚い、自然豊か。
W4	普通	移住目的（就農）が果たせている。人間関係が濃く、価値観が合わない人ともある程度は付き合う必要があるのが少しストレス。
W5	大変満足	地域の方が自分たちのやりたいことを応援してくれる。
W6	概ね満足	買い物とかは不便であるが、まあまあだと思う。
W7	概ね満足	自分の考えに近い暮らしができてから。
W8	大変満足	のどかで自然豊かな場所であり、時間がゆっくりと流れている感じが心地よい。移住して最初に感じたのは星が綺麗に見えること。
W9	概ね満足	地域の人に優しくしてもらっていますし、周辺の観光、趣味の活動等楽しむことができています。
W10	概ね満足	描いていた計画通りの田舎暮らしができています。
W11	大変満足	移住目的が達成できている。地域の人に優しくしてもらっている、地域の移住に対する支援が手厚い。
W12	概ね満足	自然環境が良く、住民との関係性も良好である。車を運転できるため、買い物やレジャーに不自由していない。害虫の出現や老朽化した家が少し課題と思っている。
W13	大変満足	地域の方に優しくしてもらっている。
W14	大変満足	娘のアレルギーは改善、地域の方々との関係は良好。自然に囲まれた住まいは自然の恩恵を肌で感じることができ、とても精神的に安定している。
W15	大変満足	未回答
W16	概ね満足	自然が豊かで静かに暮らしている。地域の方たちと仲良くしている。
W17	概ね満足	地域のひとにやさしくしてもらっている。ちょっと干渉される気持ちもある、毎日自然に癒されている。
W18	普通	完全に移住していないので、もっと色々お役に立てたら嬉しい。
W19	大変満足	移住して年数が浅いが、色々と声をかけていただいて気にしてもらっている。
W20	普通	地域の暮らしは満足している。雇用に関する社会の考えが30年前くらい前のように感じるが多い。自分の職場以外でも。
W21	概ね満足	地域のひとが子どもたちを宝物のように思ってくれること、その優しさが子供たちに伝わっていること、移住者に対して地域の人たちから困りごとはないか等声をかけてくれる。すごく助かる。
W22	概ね満足	自然豊かで車があれば色んな県に行きやすい、ネット通販を利用することが大半なので、さほど不便さを感じていない。
W23	普通	隣人も必要以上にベタベタしない。
W24	概ね満足	移住前からの目標であった店舗を開業することができた。まだ生活に余裕がなく、家庭菜園などの仕事以外の移住目的（やりたいこと）を始められていない。
M1	概ね満足	移住目的が達成できている、いつも地域の人に助けられている。
M2	大変満足	未回答
M3	大変満足	移住目的（就農）が達成できている、いつも地域の人に優しくしてもらっている。
M4	概ね満足	地域の方々と一緒に色々な作業や百姓を行っている。
M5	概ね満足	仲間に恵まれている、地域のヒトに優しくしてもらっている、子どもがのびのび遊ぶ環境がある。
M6	大変満足	自給自足の生活を目的としているため（移住目的の達成）、田畑、地域の人たちには移住した所の色々なことを教えて貰っている。

(アンケート調査により作成)

表 8 分析対象者の属性

ID	移住年	現住地	出身地	前住地	世帯構成
A	2014	白鳥町	大阪府富田林市	大阪府富田林市	夫婦
B	2008	明宝	兵庫県神戸市	兵庫県神戸市	夫婦＋子ども3人
C	1995	大和町	長崎県佐世保市	愛知県瀬戸市	夫婦
D	2014	大和町	岐阜県飛騨市	富山県富山市	夫婦
E	2011	白鳥町	岐阜県岐阜市	岐阜県岐阜市	夫婦＋子ども4人
F	1994	白鳥町	愛知県一宮市	愛知県一宮市	夫婦
G	2022	八幡町	長野県佐久市	長野県佐久市	単身
H	2020	白鳥町	愛知県瀬戸市	神奈川県小田原市	単身
I	2017	白鳥町	神奈川県座間市	福島県南会津市	夫婦＋子ども4人
J	2017	高鷲町	愛知県一宮市	愛知県一宮市	夫婦
K	2021	八幡町	奈良県奈良市	愛知県名古屋市	単身
L	2015	大和町	青森県弘前市		単身
M	2015	白鳥町	千葉県山武郡	岐阜県大垣市	夫婦＋子ども2人
N	2023	美並町	福岡県福津市	岐阜県大垣市	単身

(インタビュー調査により作成)

があることを含め、大都市での居住経験のある者が多いことがわかる。調査時点の世帯構成は、夫婦のみ世帯が5人、夫婦と子世帯が4人、一人暮らしが5人である。

2. 移住の経緯

表9は分析対象者の移住の経緯を示したものである。端的にまとめると、分析対象者の移住理由は大きく分けて農村的生活の希求、農村部での就業へのモチベーション、地域貢献の3つに分けられる。農村的生活の希求に関しては、セカンドライフ（A、C、F）、災害リスクや安全性（B、I）を考慮した結果が郡上市への移住であったことがわかる。農村部での就業へのモチベーションに関しては、知人からの紹介（L、N）や失業（D）などが移住のきっかけとなっていた。地域貢献に関しては、地方移住が持続可能性（E）や地域おこし協力隊（G）などの理念に基づく場合もあることをあらわしている。

表10は分析対象者の住宅の入手方法について示したものである。分析対象者は個人間の売買で住居入手するパターンが多い。移住前に仕事が決まっていた移住者は比較的スムーズに空き家を確保して移住ができていた（G、K、J）。一方で、社会情勢や所有者の事情で、すぐに定住できない移住者もいた（D、E）。協議会のメンバーなど移住支援組織経由で物件を確保する場合もあるが、Bのように不動産会社や空き家の管理団体がいない地域での住宅確保は難しく、物件を紹介してくれる住民に出会うまでに時間がかかった場合もあった。「今、石徹白では貸せる空き家や住居が不足している状態が続いているけど、当時は珍しく4件内見できた」（I）、「地域内に空き家はたくさんあるが、登記や仏壇などの関係で貸してくれる人が少ない」（N）と利用できる空き家の減少や、提供できる空き

家自体がないことを話す移住者もいた。中古住宅に限らず、新築の持ち家を購入した移住者もいた（D）。

郡上市への移住にあたり、補助金を受給した移住者は4人、申請予定を含めた未受給の移住者は8人、不明は2人である。補助金の内容としては、郡上市産材住宅建設等支援奨励金（A、D）、郡上市UIJ Turner・新規学卒者就職奨励金（K）が挙げられた。Mは移住関連の補助金ではないが、郡上市居住者通勤費補助金を利用している。移住関連補助金が未整備の時期に移住したため未受給である者が少なかった（B、C、E、F）。「一部の補助金の対象者であったが、受給が可能であることを知らなかった。対象であったことは、後日振興事務所から聞いたが受給期限を過ぎていた」（H）、「移住支援金（他県からの移住に対する補助金）の受給対象者で、補助金の存在は知っていたが手違いで受給できなかった」（J）と述べる移住者もみられた。調査時点で移住して日の浅いNは「市から貰える3ヶ月住むと5万円の補助金（郡上市移住支援補助金）と、1年間住むと5万円受給できる商工課からの補助金の2種類をもらいたい」と補助金の申請を検討していた。

3. 地域とのかかわり

表11は分析対象者の地域とのかかわりについて示したものである。自治会長や公民館主事など地域の自治に関わっている移住者（A、B）や、地域住民や移住者と協働しながら地域づくりに尽力する移住者（E、I）、地域おこし協力隊として地域の課題に取り組む移住者（G、H）が確認できる。いずれの移住者も積極的に地域活動に参加しており、地域貢献への意欲が高い。M自身は率先して地域活動に参加するものの、移住者の地域貢献活動が活発な現状に対して「石徹白には、頑張って何かやろうと思って移住する人が

表9 分析対象者の移住動機・経緯

ID	移住動機・経緯
A	田舎暮らしがしたい。田舎でゆっくり過ごしたいと考えていた。若い頃、岐阜方面の旅をした経験があり、特に高山市には数十回訪れたことがある。何回か旅行をするにつれて、岐阜県がとても好きになった。55歳の時に、前職を中途退職して移住先を探すことにした。友人や両親が大阪に住んでいるので、日帰りで帰れる地域や高山市に気軽に行ける地域を条件に移住候補地を回った。名古屋市栄で開催されていた移住イベント・「岐阜ふるさと暮らし相談会」で白鳥町の不動産会社の担当員と出会い、伝手を利用して郡上市へ移住した。
B	神戸市在住当時、阪神淡路大震災を経験。水、電気などのライフラインがストップし、苦労した経験から何があっても生きていける地域で暮らしたいと考えようになり、田舎に興味を持つ。学生時代、全国の田舎を巡っていたところ、郡上市で自然体験旅行を企画・運営している「郡上・山と川の学校」のアルバイトスタッフとして参加したことをきっかけに郡上市を知る。そこで出会った民宿のお年寄りたちの話を聞き、キャンプでの交流を通して、田舎のお年寄りの生き様に憧れるようになった。郡上市に住んで、彼らと同じような能力を身に着きたいと感じ、大学3年生の時に（2005年頃）移住を決断した。
C	昔から休暇を利用して、鮎釣りをしに郡上市を訪れていた。定年退職を機に、田舎暮らしがしたいと考えインターネットを利用して移住地を探していた時、たまたま郡上市の工務店の物件を見つけて移住を決めた。
D	高校卒業まで佐世保市に住み、就職を機に愛知県名古屋市の7年、瀬戸市に8年暮らす。愛知県在住時代に、バブル崩壊を経験。失業する。ラジオから流れる北島三郎の「与作」を聞き、林業や自然を相手にする仕事に憧れた。丁度、そのタイミングで当時の中日新聞に愛知県から郡上市に移住を果たし、林業に携わっている人の記事を見た。彼に直接話を聞くべく、郡上市にある職場を訪れた。初めて、郡上市を訪れた際、森林組合の専務と知り合う。山仕事がしたいと伝えたら、大和町の森林組合を紹介してもらった。仕事だけではなく、暮らしの面でも専務や森林組合にお世話になった。
E	2007年から石徹白へ通う。地域と関わりを持ち、持続可能な社会・地域づくりがしたいという気持ちが大きかった。当時、東京都に住んでいたが、地元である岐阜県に拠点があるNPO法人での活動の一環で、水力発電を設置することになった。一つの地域に絞って活動がしたいと考えた際、石徹白に訪れ、人間関係や文化等を見て高度成長期以前の日本人の精神性や地域について地域の人から学びたいと感じた。これらの体験から石徹白の地域づくりがしたいと決意し、拠点を置くこととした。
F	移住前から何度も釣りをしに石徹白を訪れていた。就職（就業）して以降、休暇を利用して全国各地で溪流釣りに行っていたが、1番釣り場として魅力を感じたのが石徹白だった。移住前は、一宮市（旧尾西市）で和菓子屋をしていた。番頭をやっていて、お金の管理をしていた。仕事に疲れてしまい、定年退職後は趣味の釣りができる場所に移住がしたいと考え、郡上市への移住を決めた。
G	愛知県の大宮市に在学中、ゼミの卒業旅行で郡上市へ旅行に来たのがきっかけ。大学では、日本史を専攻していたので、旅行の1日目に郡上市を訪れた。郡上八幡城や、城下町、大滝鍾乳洞を散策した。岐阜県に居住経験はなく、岐阜県を訪れた経験はほとんどない状態だった。岐阜県にはあまり詳しくなかった。大学卒業後は、地元である長野県に戻って3年半ほど土木関係の仕事をしていて。現場に出て、土木関係の仕事に従事するうちに自信がついた。そこで、実家から出て独立し、自己のスキルアップがしたいと考えた。一人暮らしを考えた際に、地元である長野県と学生時代の友人が多く住んでいる愛知県の両方にアクセスしやすい岐阜県に移住することにした。岐阜県の中でも、特に印象に残っていた郡上市に移住したいと考えた。元々、地域おこし協力隊に興味があり、当時指導係であった職場の先輩と現場に出る度に、地域おこし協力隊の話をしていた経験があり、お互い地域おこし協力隊に興味があり、熱心に情報収集をしていた。協力隊員を募集するWebサイトを見ていた時に、丁度郡上市の募集があったため、応募をした。
H	3年前、29歳の時に友人に連れられて石徹白・白山中居神社を訪れる。何千年前からこの地に存在している自然の荘厳さに圧倒された。また、その自然を守り続けている人間の営みから生まれている空間に感銘を受けた。移住以前は企業のコンサルティングをしていた。仕事場づくりや、学習プログラム、人の変容に興味があった。前住地である神奈川県小田原市に帰って振り返った時、家の近くで畑をやっていたが、暮らしが自分の家の周りだけで完結していて、自分の暮らし自体が自然と繋がっていないという感覚を持った。この経験から自分の暮らしと自然が密接に繋がる場所で暮らしたいと思うようになった。しかし、この時点で石徹白への移住の選択肢は頭になかった。ふと、中居神社のことを思い出して、あの人たちはどういう暮らしを作るのか、どんな人たちなのかと考えた。神社の名前を友人から聞き、調べるようになった。そこで改めて郡上市や石徹白を知った。石徹白のような場を作れる人たちはどういう人なのか興味湧いた。石徹白に住む人のような自然な人でありたい、いろいろな自然が調和している場所で自分自身もそういう人間になりたいという漠然とした考えが生まれた。すぐに、石徹白地区地域づくり協議会に問い合わせをして、2020年の冬に移住を果たした。
I	東日本大震災を経験。震災後、仕事である自然学校の運営や安全確保のために約6年移住先を探す。特に、子どものために放射能の影響が少ない土地を中心に検討していた。しかし、移住に踏み切ることができず悩み、移住の具体的なビジョンやライフスタイルを夫婦で話し合った。自然や生態系の中で活かされる生活がしたいという結論にたどり着いた。前住地である福島県南会津市で自然学校を運営していた。2016年12月に開催されたキャンパイベントにボランティアとして参加していた人から石徹白地区を紹介された。石徹白は、理想とする自然条件が全て揃っており、人生の目標としている「生態系の一部」としての暮らしが実現できると感じ、移住を決めた。
J	大学卒業する時に働きたいって思うところがなくて。小さい時に家族でよく遊びに行っていた牧歌の里を思い出した。それで牧歌の里で働きたいなと思い、新卒での就職をきっかけに郡上市へ移住した。
K	転職を機に移住。チームまちやでの仕事が、興味がある分野であった。地元の奈良市で就職、転職して名古屋市内で働き、再度転職を考えた際にSNSで偶然チームまちやの求人募集の広告を見つけた。Kさん自身古民家や町家に対して興味があり、当時名古屋市内で持ち家のリフォームの仕事をしていたこともあって、すぐ応募した。空き家対策として自分の裁量で空き家の再生できる点に惹かれて応募した。採用前に一度八幡町に来て、視察を兼ねて街歩きをした。大学で、町並みの研究をしていた。訪問するまでは、郡上八幡が岐阜の小京都と呼ばれるほど観光地のイメージが強かったが、実際に訪れてみると観光地ではなく、住むの人のための街としての魅力を感じた。いい町だなって思った。無事、チームまちやの職員として採用が決まり、移住した。
L	知人が働いている会社が郡上市で、その紹介で知人が在籍している会社に就職するために移住。
M	石徹白の移住者が執筆した書籍を読んで、その移住者の現在を調べているうちに、石徹白に辿り着いた。石徹白には、樹齢1800年の大杉があり、夫が夫の巨木好きであることも相俟って2014年の秋頃石徹白への旅行を決めた。宿泊した旅館や中居神社等から見た景色の美しさや静けさに、心地よさを感じた。特に夫は大杉にとっても感動していた。子どもの妊娠を機に、現在の暮らしを見つめ直す。前住地での便利な暮らしに疑問を抱く。生きている実感、生きる喜びを感じたい、自然が豊かな土地で子育てがしたいと考え、移住先を探すことにした。石徹白は当初移住先候補ではなかった。旅行後に妻は、大垣市周辺地域を移住候補地として回っていたが、石徹白での体験が忘れられず、石徹白を上回る良い場所に出会えなかった。石徹白を訪れて以降、無意識に石徹白と比較しながら移住先探した。移住先が見つからず半ば諦めかけていた。岐阜県池田町にある個人商店でギャラリーも開催している個人商店で、夫の書道作品を展示させてもらった際に紹介された空き家のある地域が偶然石徹白で、紹介してくれた人が石徹白に住んでいた人だった。すぐ、石徹白の物件を見せてもらい、現在住んでいるうちを紹介してもらった。
N	就職を機に東京に十年程住み、Uターンで福岡県に戻ってきていた。東京では、CM制作の仕事をしており、そのスキルを活かして福岡に戻った後は、友人の手伝いでyoutubeで動画を投稿していた。その時に仲良くなった人がいて、DMでやり取りをしていた。その人の勧めで一緒に2022年11月頃飛騨高山へ旅行に行くことがあって、交流を深めていた。福岡で働きながら県外への移住を視野に入れて、求職活動をしていた。その方に相談したところ、現在の就職先である自然体験施設の社長を紹介してもらった。それまで郡上市のことは知らなかった。岐阜県にある田舎というイメージだった。転職を機に郡上市へ移住。丁度、みなみ風を立ち上げるタイミングで、ゼロから新しいことを立ち上げて新しい活動をしようとしている話を聞いて、「まさに自分が求めていた仕事だ。」と興味を持った。

(インタビュー調査により作成)

岐阜県郡上市における移住者の移住行動とその背景

表 10 分析対象者の住宅の入手方法

ID	住宅の入手方法
A	「岐阜ふるさと暮らし相談会」で白鳥町の不動産会社の担当員と出会う。何件か紹介してもらっても、既に借り手が決まっていたり希望の立地ではなかったりしたため、1年ほどかけて物件を探す。最後に、現在の住居に行き着いた。選ぶほど物件がなかった。
B	大学を2006年に卒業後、明宝にて1年ほどかけて住居を探す。明宝に不動産会社がなく、空き家を整備している団体がなかった。定職につくまでスキー場のアルバイト等を行った。アルバイトと並行して地域住民との信頼関係づくりと住居探しに1年ほどかかった。
C	移住当時、郡上市を通る高速道路建設の工事があり、空き家が宿舎がわりに使われていたため、半年～1年ほど住居が確保できなかった。最初は同町M地区の集会所跡地に約2年住み、住居の貸し手が現住地であるN地区で見つかり、20年間住んでいた。現在は、N地区内で知り合った地域住民の空き家に6年居住している。
D	郡上市の工務店の物件を購入。新築（持ち家）。物件に求める条件として、日当たりが良く近辺に住居がないような開放的な物件を希望していた。また、富山県で家庭菜園をした経験があり、畑ができる物件を探した。インターネットで夫妻の条件に合いそうな物件を見つける。実際に足を運んで見てみるとイメージが違っていたので別の物件を見せてもらうことになった。2軒目に紹介された物件が現在の住居である。家を買うことを即決した。
E	住居がなかなか確保できなかった。入居を予定していた住居があったが、大家さんの諸事情で貸してもらえないことになってしまった。2010年の冬に、現在の住居を紹介してもらい、購入に至った。
F	地元住民から土地を購入した。住居の土地だけではなく、畑の土地なども沢山借りた。当初は、釣りに来て泊まる形式の小さな別荘をつくりたいと考えていた。貸し手である地元住民から子どもが来た方がいいかなとアドバイスをもらい、大きな土地を借りることにした。
G	現在は、空き家になっていた協議会メンバーの家を借りて生活している。地域おこし実践隊としての移住が予め決定していたので、住居の確保に苦労することはなかった。最初に貸してもらった住居は単身で生活するには広すぎたから、小さな家に引っ越した。1件目も2件目も協議会メンバー所有の空き家である。
H	空き家を借りている。物が沢山あり掃除ができていない。現在の住居は2件目であり、2023年9月から住んでいる。1件目の住居には約2年半住んだ。現住居は日当たりが良く南向きの物件なので気に入っている。しかし、建物は風が全部通る作りではなく、若干湿っぽいと感じている。2件目の住居に引っ越したばかりなので、軌道に乗っている感触はあまりないが、石徹白での生活はまあ慣れてきた。
I	5度石徹白に訪問して移住にむけた準備をした。3度目の訪問では家族全員で石徹白を訪れて、お家を見せてもらった。内見した4件の中で、住居を決めた。
J	移住後5年間は、リゾート施設の社員寮で生活していた。現在は、元保養所の一部をリフォームした物件に住んでいる。住居は仮住まいで、家ができるまでの期間住んでいる。物件を探すのに、1年ほどかかった。
K	チームまちやの元職員の住まいを引き継ぐ形で居住している。チームまちやの社宅の位置づけの住居。
M	10月まで民宿兼居住地として池田町の老夫婦が住んでいた物件だった。11月に購入した。住居は割と綺麗な状態で保存されていて、厨房が広く、民宿で使用していた寝具も綺麗なまま残してくれていた。
N	空き家利用。地域内で空き家を貸してくれる人がなかなかいなかった。

(インタビュー調査により作成)

表 11 分析対象者の地域とのかかわり

ID	地域への印象・地域とのかかわりに関する発話
A	冬になると、積雪量が多いので、除雪を怠ると埋もれる。お隣さんなどが生活が大変で後悔しとるやろうと心配してくれる。大阪に住んでいる頃よりも、ご近所付き合いが増えた。世間話、飲み会やお裾分けとか。野菜をよく頂く。濃い付き合いをしている。地域住民の方々が声を掛けてくれる。近所の高校生が時々遊びに来てくれる。近所の人とは、結構顔見知り。大阪から来た変わり者として、興味を持ってきている。以前、H地区の自治会長を2年ほど務めた経験がある。その前は会計を2年ほどやった。地域の行事や取り組みにも積極的に参加している。頻繁に顔を出す。
B	移住前・直後は、郡上市のいいところしか見えていなかった。自然が豊か。地域の繋がりが強く、理想通りの豊かな田舎。移住後は、人口減少・過疎化・人口流出などの地域の課題が目につくようになった。コンビニが近くにないため、食料調達が大変だった。近くのスーパーまで車で20分かかる。都市部から田舎の生活様式になれるまでに時間がかかった。現在、公民館主事を務めている。専任2人と明宝全地域から主事5人が集まり、地域の文化伝統を守っていく活動をしている。企画を考えて準備をして実施する。明宝の小学校を対象に、月1回のペースで行っている。地域の活動にも積極的。移住当初は、お年寄りの雪かき・雪下ろしの手伝いなどをしていた。ご馳走してもらったり、お風呂をいただいたりした。現在も、交流は多い。
C	地区内での人間関係が狭く、噂話とかが多いと感じる。何をするにも、森林組合の組合長などが仲介してくれたので、地域住民間でのトラブルはなかった。ただ、珍しがられた。移住前に、勤め先が決定していたため、地域住民も安心してくれた。近所のひとが声を掛けてくれた。日中は、仕事に出ていてご近所付き合いができないので、集会や行事には積極的に参加していた。林業従事者のスキルを活かし、草刈りなどの美化運動も積極的に参加した。M地区に住んでいた頃は、畑を貸してくれる人がいた。
D	移住当初は、不便さが苦痛だった。近くに施設が少ないため、高速バスを利用して名古屋市に買い物に行くことが多かった。富山県や飛騨市と比べると降雪量が少ないので、生活が楽。ほとんど交流がない。年に数回（2回ほど）美化運動（用水路の掃除・草刈りなど）に参加している。美化運動は地域の慣習であるため、必要最低限参加している。（1班5名ほど？）住居近くの空き地の草刈りもやる。組の人とも、あまり話さない。地元住民側もあまりかかわって来ない。普段から顔を合わせることもない。祭事も参加しない。葬儀は参加する。現在でも、住居の幹旋をしてくれた工務店の社長や専務とは交流が続いている。米とかくれる。気にかけてくれている。困りごとがあるとすぐ助けに来てくれる。
E	約3年石徹白に通って地域の雰囲気づくりに尽力したので、地元住民は皆顔なじみになっていた。移住する際には、歓迎された。地元住民や移住者の仲間とともに石徹白の地域づくりに尽力している。
F	地域内の移住第一号だったので、住民との関わりに苦労した。高齢での移住だったため、周囲からの風あたりが強かった。土地を購入したからといって、すぐ印象が良くなることはなかった。移住後は、屋台販売や農業など様々な仕事をした。民泊（子ども向けの農家民泊）もしている。現在は、風当りは落ち着いたが、地元住民や移住者との付き合いは必要最低限しかしていない。
G	移住初期は知り合いが誰もいない状態だったので、人付き合いが上手くできるか心配だった。協力隊は受け入れ団体（協議会）があるので、協議会のメンバーがサポートしてくれた。地区内では美化運動などの地域活動が多く設けられているので、可能な限り参加をして地域住民と交流している。日常的に近所の喫茶店などに行き、地域住民との会話を楽しんでいる。
H	雪がたくさん振る。Hさん自身、暮らしの中で大雪を経験したことがなかったため、雪の多さに驚いた。自然にตอบสนองしながら自分が暮らしを求めて移住したので、特に不便さは感じていない。自然環境による暮らしの不便さや過酷さを、日常的な暮らしの障害として認識していない。楽しんでいる。郡上市へ移住するまでは、マンションでも一軒家でも近隣の住民に挨拶するぐらいとかお裾分けする程度の地域付き合いだった。石徹白はほとんど顔見知りなので、困りごとがあると近所の人が助けてくれる。逆もまた然り。Hさん自身も、できる範囲で手伝っている。生活面において、助け合う場面が多々ある。現地域おこし協力隊として活動している。
I	移住した2018年の年度末に当時の地域おこし協力隊員の任期が終了することが決まっていた。前任の引継ぎで観光やエコツアーをもう少し深めていく活動をしませんかという話を持ち掛けられた。Iさん自身、石徹白の地域資源を活用する仕事をしたかったと考えていたため、地域にとって役立つ話と快諾した。2018年の4月から3年間地域おこし協力隊として活動した。地域の人とは、積極的に関わるようにしている。地域の人と移住者・関係人口の架け橋となっている。
J	同町に住んでいる地元住民の方と2022年に結婚。リゾート施設社員時代より、結婚後の方が地域の住民の人との交流が増えた。地域活動に参加することは殆どない。リゾート施設時代の仕事仲間と週に1回体育館を借りてバレーボールをして遊んでいる。結構同年代、同世代若者が殆どいない。親世代の住民と仲良くなることもある。地域内の婦人会の活動への参加を検討しているが、義母から「家を建てた後から参加すればいいんじゃない」と言われており、現状未参加となっている。ご近所付き合いに関しては、特に何もしていない。近所に家が1軒しかないので、活発な交流がない。
K	年に2、3回ある美化運動や防災訓練にも参加。どうしても参加できない時は、事前に断りを入れておくようにしている。どの地域活動も、基本的に都合がつけば参加している。地元住民との関係は良好で、家庭菜園で育てた野菜をお裾分けされることがある。移住前に危惧していた過密な交流は全くなく、過度に干渉されることがないのでありがたいと感じている。八幡町内の方は昔から地域に住んでいる方が大半なので、過度な期待をされていない。地域活動に参加してくれるだけでも嬉しいというスタンスで接してくれるので、負担はなく暮らしている。
L	なぜ青森から郡上に来たかを聞かれることが多い。近所の方々が優しい人が多く一人暮らしを心配してくれたり野菜をくれたり親切にしてもらっている。美化活動等は一人暮らしで働いていることを考慮してもらっており自治会費を払うのみ。今年は夏祭りの寄付をした。ご近所の方とは仲良くさせていただいており、野菜をいただいたり、こちらからは実家から届くりんご等をお裾分けしたりしている。
M	移住前より買い物の回数が減った。率先して地域活動に参加するようにしている。たまに声かけたりとかするんやけど、いてくれるだけで十分ありがたいと言ってくれる。空き家の所有者からは「はっきり物事を言う人たちばかりだから」と移住生活を心配されることが多々あるが、何か言われたとしてもあまり気にしていない。つかず離れずの距離感を保ってくれていて、居心地が良い。まっすぐにものを言う住民に、好感を持っている。
N	仕事内容が土日中心なので、美化運動等の地域活動は、参加できていない。移住してから、居住している地区の自治会長に連絡を入れていないので、催促の声が掛からない。「ああ、なんか若い兄ちゃんがいるな」ぐらい。仕事が多忙なため、地域活動への意欲はやや消極的である。知らない人でも挨拶をしたり、話しかけられたりすることがあり、驚いた。人との繋がりを強く感じる事が出来ている。

(インタビュー調査により作成)

多い。私たちはどちらかと言うと、穏やかに幸せに暮らしたいと思って移住しているので、移住のモチベーションや目的に差がある」と感じている。以上の7人は地域へのかかわりの程度が強い移住者に分類できる。

以下の3人からは、積極的に地域参加する移住者というこれまで示してきた像とは異なる、移住者の地域参加の実情が見えてくる。具体的には、Kは地域内での人付き合いは良好であるが、地域住民と密な交流をしていない。Cは集会や行事には積極的に参加しているが、仕事の都合で近所付き合いができない。Lは仕事の都合で自治会が指定した枠組み内での必要最低限の参加となっている。Kは、移住前に田舎特有の地域住民との交流や町内の人付き合いに対して不安を抱えていた。単身での転居経験があり、馴染みが無い土地に転居すること自体に大きなハードルはなかったが、田舎暮らしを経験したことがなかったため、田舎暮らし＝近所付き合いが濃いというイメージを持っていた。また、「思っていた暮らしと違った」と理想の暮らしと現実の暮らしにギャップを感じたという話も耳にするため、移住前と移住当初は少し身構えていた。しかし、移住前に危惧していた過密な交流は全くなく、過度に干渉されることもなかった。若者が移住して来るということで、無条件に歓迎してくれる空気があった。地域に上手く馴染めるかという心配は杞憂に終わったと、地域住民との程よい距離感を評価していた。以上の3人は地域へのかかわりが中程度の移住者に分類できる。

「地域へのかかわりの程度が弱い」に分類した移住者は4人である。定年退職後のセカンドライフの満喫や自然に囲まれた静かな暮らしを求めているので、地域への関心そのものが低い移住者（D、F）や、就業環境の影響で地域活動への参加ができていない移住者（J、N）がいた。Dは、集落から離れた位置に住宅を建てたため、ほかの住民と日常的に会話する機会がなく、顔を合わせることもない状況である。それでも近隣住民から「草刈りや農業用水路の清掃は全員でやる集落のきまり」と言われているため、そうした活動には参加するようにしている。Jは就業目的で移住をしており、社員寮での生活が長かったため地域活動への参加や地域住民と交流する機会がなかった。結婚後の生活でも、地域内の住民とのかかわりや地域活動への参加がほぼない状態である。Nの出身地・前住地である福岡は基本的に、隣の家の住民とは軽く挨拶をする程度の交流で、近隣住民とすれ違っても挨拶をしてこなかった。「ほぼ知らない人という認識が当たり前であったが、移住先では知らない人でも挨拶をしたり、話しかけられたりすることが多々あり、驚いている。今の暮らしは、人との繋がりを強く感じる事が出来

ている。ただし、嫌われたら村八分の可能性もあるので、近すぎず遠すぎずの距離感を心掛けている。また、地域住民から、野菜などのお裾分けを貰う機会があり、お返ししなければいけないのかというプレッシャーを感じている」と率直に述べた。

V 考察

本章では、前章までに得られた結果をもとに移住者の移住行動について地域間で比較する。まず、白鳥町石徹白地区では、空き家を購入して持ち家としている移住者世帯が多く、個人間のやりとりで生活拠点を確保している。郡上市以外の移住候補地がなく、石徹白地区への移住を目的としていた移住者が多い。この姿勢は永住意識にも反映されている。移住者の多くが30歳代～40歳代の子育て世帯であることも特筆すべき点であろう。

このような属性や態度を有する移住者が集まる理由として、白鳥町石徹白地区地域づくり協議会が主体となって子育て世帯の移住を推進していることが挙げられる。同組織は、子どもがいるまたは今後子どもの出生が見込まれる世帯、長期定住を予定する世帯を移住者の条件としており、移住希望者に対する面談を通じて選別的な提案を行っている。郡上市の移住支援組織や移住相談窓口の中で唯一移住希望者の選定を行っているため、子育て世帯かつ定住に対して覚悟をもっている移住者が集まりやすいと考えられる。

一方、和良町では、移住支援組織からの紹介で空き家を賃貸している者が多い。居住地選択の特徴としては、他地域の移住者と比較して移住候補地の数が多く、範囲が広域である点が挙げられる。白鳥町石徹白地区の移住者は30歳代～40歳代が多かったのに対し、和良町の移住者は30歳代8人（33%）、40歳代4人（17%）、50歳代7人（29%）、60歳代前半2人（8%）、65歳以上3人（13%）と移住者の年齢にばらつきがみられた。愛知県出身者や前住地が愛知県である移住者が多い。

他地域の移住者と比較して移住候補地の数が多く、範囲が広域である理由として、移住希望者のほとんどが、田舎暮らしを移住理由としており、インターネットを利用して移住というワードで検索をかけたり空き家の情報がある地域を検索したりして和良町を認知するケースが多いことが挙げられる。決め打ちで移住先を決定しているのではなく、個々の移住条件に合致する地域を複数比較した上で移住先を選定している。空き家事業、移住希望者に対する面談の義務化、移住支援組織を活用しなかった移住者に対しての働きかけといった移住支援組織の充実した活動が、移住希望者の選択に影響を与えている。

白鳥町石徹白地区の移住者と比較して年齢にばらつきがある理由は、和良町の移住支援組織が移住者に対して特別な条件を設けていないことが挙げられる。年齢や性別などの属性で移住希望者を選定しておらず、基本的にどのような移住者でも歓迎するスタンスをとっている。和良町と隣接する下呂市にはJR高山本線が通っており、和良町は郡上市内の他地域と比較して愛知県へのアクセスがよい。こうした交通条件も愛知県出身者や前住地が愛知県である移住者が和良町を選択した背景にはあると考えられる。

白鳥町石徹白地区と和良町を除く郡上市内の地区への移住者は、アンケート調査で世帯について回答した4人、個人について回答した6人、インタビュー調査の対象者5人の計15人である。年齢は20歳代3人(20%)、30歳代3人(20%)、40歳代3人(20%)、60歳代1人(7%)、70歳代5人(33%)と若年層と高齢者層に二分されている。夫婦のみ世帯が多く、地域とのかかわりが弱～中程度の移住者が多い。

このような移住者が集まる理由として、白鳥町石徹白地区や和良町のような積極的に活動する移住支援組織がないことが考えられる。このため移住希望者は、移住条件を課されることも、面談で地域参加を勧められることもない。子の有無や地域活動への態度を問われることなく、各々のライフスタイルに則した地域に移住可能である。移住者と地域住民との間を取りもつ移住支援組織がない地区では、移住者が地域住民と関わる機会が少なく、そのことも移住者の地域とのかかわりが弱いことに反映されていると思われる。

佐藤(2023)は、移住支援組織が移住希望者との面談を義務化するケースや自治体の相談窓口における移住希望者の選別を指摘した。一方で、農林水産政策研究所によれば、移住支援組織のない地域では移住者数が減少する傾向がある²⁾。本研究においても、移住支援組織による移住希望者の選別や移住行動への様々なレベルでの関与が確認され、そうした移住支援組織の合併前旧町村レベルのローカルな活動は移住者の特徴や定着に地域差をもたらしうる可能性が示唆される。

Ⅵ おわりに

本稿は岐阜県郡上市を対象地域とし、移住者の移住行動とその地域的差異を明らかにした。白鳥町石徹白地区への移住者は子育て世帯かつ移住・定住に対して覚悟をもっており、和良町への移住者は現住地での定住の必然性が必ずしも高くなく、上記2地区以外の地域への移住者は自身の仕事や生活を重視するため社会的な交流が控えめである。移住者の属性や態度に関して地域的差異が生じる背景には、合併前旧町村レベルで活動する移住支援組織の理念や移住者への直接的・

間接的な関与があると考えられる。ただし、本研究は郡上市内の7つの旧町村すべてで調査を実施した訳ではないため、これらの調査結果を過度に一般化することはできない点に注意が必要である。

最後に、本研究で言及されなかった以下の点は課題として残される。まず、Uターン後に特定の市町村にIターンする移動の傾向についてである。地方移住を扱った研究で出身地から現住地までの移動経歴に注目した研究は少なく、本研究で明らかになったこうした傾向が岐阜県郡上市以外でも生じているかについて実態把握が待たれる。移住先付近の地域にUターン後にIターンする移動以外にも、地方移住にはいくつかのパターンがあることが予想される。

次に、移住者の日常生活行動や地域参加についてである。本研究では人口移動の面から地方移住の実態を捉えたため、移住後の暮らしや振る舞いについては十分に検討していない。今後は移住者が移住先地域に与える影響について明らかにする必要がある。移住者の転出可能性も検討すべき課題だろう。地方移住者を親にもつ「地方移住2世」が成長後にどのような移動をするのかも興味深い。

謝辞

快く調査に協力してくださった郡上市の移住者の皆さま、移住支援組織の皆さまに感謝いたします。本稿は筆者の奥田が2024年2月に愛媛大学社会共創学部に提出した卒業論文を加筆修正したものである。

注

- 1) 農林水産政策研究所の定義によれば、移住支援組織とは、行政部局以外の組織であり、自分たちの活動目的に沿って移住者の移住支援を行う地域組織の全般を指す(https://www.maff.go.jp/primaff/seika/pickup/2021/21_05.html、最終閲覧日：2026年6月24日)。
- 2) https://www.maff.go.jp/primaff/seika/pickup/2021/21_05.html (最終閲覧日：2026年6月24日)

文献

- 石川菜央 2018. ライフスタイル移住の観点から見た日本の田園回帰. 広島大学総合博物館研究報告 10: 1-11.
- 井上 孝 2002. 人口学的視点からみたわが国の人口移動転換. 荒井良雄・川口太郎・井上 孝編『日本の人口移動—ライフコースと地域性』53-70. 古今書院.
- 小田切徳美・筒井一伸編 2016. 『シリーズ田園回帰3 田

- 園回帰の過去・現在・未来―移住者と創る新しい農山村』農文協.
- 黒川真由・河合美歩・藤井真奈美・本木彩未・中西一矢・橋本実紅・細川瞬・林琢也 2019. 郡上市和良町における移住者と地域住民の交流に伴う意識の変化―共生社会を考える. 地域生活学研究 10: 22-37.
- 作野広和 2016. 地方移住の広まりと地域対応―地方圏からみた「田園回帰」の捉え方. 経済地理学年報 62: 324-345.
- 佐藤真弓 2023. パッケージ化される農村移住. 渡邊悟史・芦田裕介・北島義和編『オルタナティブ地域社会学入門―「不気味なもの」から地域活性化を問いなおす』83-106. ナカニシヤ出版.
- 佐藤 遼・城所哲夫・瀬田史彦 2014. 地方への移住関心層と移住可能層との間での地方移住生活イメージに対する選好パターンの違い―移住先地域での暮らし方・働き方の質に関するイメージに着目して. 都市計画論文集 49: 945-950.
- 鈴木修斗 2023. 軽井沢町およびその周辺の新興別荘地区における現役世代のアメニティ移住. 地理学評論 96: 1-32.
- 林 琢也 2015. 「取り残される農村」は消滅していくのか?―郡上市和良町での「経験」とそれをもとにした「反証」. 地理空間 8: 321-336.
- 林 琢也 2019. 地域づくりの現場で学ぶフィールドワーク教育の成果と課題―郡上市和良町を事例に. 経済地理学年報 65: 45-60.
- 林 琢也 2023. 農村への移住・定住に果たす仲介者・支援団体の役割―岐阜県郡上市「和良おこし協議会」と移住者の関係に注目して. 北海道開発協会編『北海道における移住・定住に向けた取り組み』19-25. 北海道開発協会.
- 渡邊悟史・芦田裕介・北島義和編『オルタナティブ地域社会学入門―「不気味なもの」から地域活性化を問いなおす』ナカニシヤ出版.